

中華人民共和国建国直後の識字教育における 民衆教師の実態と役割に関する研究

— 1949 年から 1958 年まで —

万 静 嫻

はじめに

本稿は、中華人民共和国建国直後（1949～1958）⁽¹⁾における「識字教育」運動の一断面として、民衆教師の教育活動をめぐる諸状況について考察することを課題として設定する。このことを通して、当時の民衆教師の実態と役割を明らかにしたいと考える。

1949 年、建国直後の中華人民共和国は、戦争による長期的な社会的混乱が一段落した。新政権にとって、政治権力の正当性の確保は極めて重要な課題であった。新政権は、従来の民族的抑圧と封建的抑圧を打破し、「人民が主人公となる新しい中国を樹立した」という宣伝を繰り返した。しかし、人民の合意がない限り、強力な国家建設の遂行は考えられないため⁽²⁾、教育を通して民衆に新政権のイデオロギーを受容させることが重要視された。1949 年 9 月 29 日、暫定憲法となる『中国人民政治協商会議共同綱領』では、「革命及び国家建設の求めに応じ、教育を普及する」と規定された⁽³⁾。

しかしながら、建国直後の中国において、農村部では 95% 以上の人が非識字者であった⁽⁴⁾。より多くの人たちに国家意思を理解させるため、教育普及の一環としての識字教育は重要な課題になった。1949 年 11 月 1 日には、中央人民教育部が成立し、その下に社会教育司、識字運動委員会が設置された。これを皮切りとして、識字教育に関わる一連の動きが見られた。1952 年 11 月 15 日には、掃除文盲工作委員会が設けられた。その後、1954 年 11 月 18 日には、集中的かつ統一的な指導を強化するため、掃除文盲工作委員会は教育部に編入された。また、公的機関のほか、1956 年 3 月 15 日には中華人民共和国全国掃除文盲協会という大衆組織が設立された⁽⁵⁾。

しかし、当時の中国においては、全体の小学校の入学率は約 20% であり⁽⁶⁾、人口の多い農村部の入学率が全体より低いため、非識字者の数は膨大であった。識字教師の不足という問題に直面したため、識字教育の展開は順風満帆とはいかなかった。

また、50 年代に極貧にあった中国では、識字教育を行う必要な経費がなかった。当時の教育先進地域であった江蘇省では、中国国家統計局が発表した「1955 年度江蘇省財政収入と支出」により、江蘇省財政支出は 2.88 億元だった。しかし、「江蘇省教育庁計画財務処：1955 年省級単位支出年度予算及び省人委確定通知」によると、教育経費は約 1389 万元であり、総支出における割合は 4.8% しかなかった。その中で、識字教育への支出は約 8.3 万元で、教育経費の 2.1% に過ぎなかった⁽⁷⁾。教育

先進地域であった江蘇省さえ識字教育の予算が不足していたが言えよう。

さらに、社会学者である費孝通は中国の社会は「郷土社会」⁽⁸⁾であると述べている。このような社会には、必要な情報は口で伝えられており、文字という間接的な「道具」は不要である⁽⁹⁾。当時の民衆は、識字に対する学習意欲がなかったのである。

しかし、多くの問題があるにもかかわらず、当時の識字教育は驚くべき成果を成し遂げた。1956年まで、全国の農民識字教育の入学者数は6200万を超え、識字率が著しく改善された⁽¹⁰⁾。

今まで従来の中華人民共和国建国後の識字教育に関する研究においては、全体的に俯瞰する研究が主流であった⁽¹¹⁾。民衆教師に関する研究では、識字教育について概観した研究の一部として、民衆教師の構成や研修などの問題が検討されている⁽¹²⁾。しかしながら、当時の民衆教師を中心にして、彼らの実態と役割分析に関する研究は管見の限りではほとんど蓄積がない。

建国後に行った識字教育は、社会教育の柱としての成人教育の雛形であり、重要な意味を持つと言える。識字教育に身を投じた民衆教師の実態と役割を明らかにすることは、歴史的な価値があると思われる。本稿では、50年代出版された新聞『人民日報』や雑誌『人民教育』などの史料により、1949年から1958年まで「数と質が不足」と考えられた民衆教師が、「非識字者の学習意欲がない」と「識字教育の必要な経費が足りない」という問題を乗り越えて、如何にして識字教育を成功させたのかを解明する。

1. 民衆教師の登場の経緯

50年代の中国は、農村部で95%以上の人が非識字者であり、教師の不足という問題に直面していた。より多くの識字教師を求めるため、当時の教育部長である馬叙倫は、1950年11月10日に行われた「第一次全国工農会議に関する報告」で、初めて「民衆教師」という概念を提起した⁽¹³⁾。

「識字教育においては、当地域のあらゆる読み書きのできる者を動員し、民衆教師として識字教育に参加させる。即ち、識字教育においては「以民教民、能者為師」（民を持って民を教え、能力あるものを師にする）という方針を策定する。」

また、1955年6月2日、国務院が発布した「農民業余文化教育の強化に関する指示」の中には、民衆教師の動員を促した⁽¹⁴⁾。

「識字教育においては、各地で幅広く読み書きのできる者を動員して集め、余暇を利用させ、識字教育に参加させる。これは、読み書きのできる者として当然負うべき責任および光栄なる任務を民衆教師に理解させる。このような民衆教師は、公的機関・団体の従業員、工事技術者、農村に帰って農業生産に従事する小・中学校の卒業生、識字教育を受けた農民や、知識分子などを含む。」

このように、専任教師のほか、一般民衆の中の簡単な読み書きができる人たちを集めるために、民衆教師が識字教育の舞台に登場した。1953年に発布された「江蘇省人民政府文教委員会 1953年以来掃盲工作状況及今後工作意見的報告」によると、当時江蘇省の識字教育は、専任教師はおよそ8000人で、民衆教師は10万人以上がいた⁽¹⁵⁾。即ち、識字教師の9割以上が民衆教師であった。しかし、その9割以上を占めた民衆教師の中で、元から識字レベルが低い非識字者からなった「五字先生」、「十字先生」と呼ばれ、本当に5文字や10文字しか読めない民衆教師も多くいた。河北省の16県の統計によれば、民衆教師の4233人のうち、初小（小学校3年）以下の割合は72%であった⁽¹⁶⁾。当時の状況では、識字教育には、民衆教師の質より数のほうが重要視されていたことが推測できる。

2. 識字教育の動員

(1) 民衆の学習意欲の喚起

前述のとおり、「郷土社会」である当時の中国社会では、文字は「不要だ」と見なされた。それゆえ、当時の民衆に「不要」と認識された識字教育を、如何にして「必要」になることが重要な課題になった。当時の民衆教師は、主に2つの方法で人々を動員した。

まず、識字教育に対する有利な世論を形成するため、社会全体においては、「訴苦会」という大衆の集会を進行した。

「訴苦会」はもともと解放戦争期（1945年8月～1949年9月）に、軍隊中で行う階級教育の一種であった。旧社会や反動派から受けた苦しみを訴えることを通し、軍人は自分が人民解放のために闘争しているという自覚を高めることができた。建国後、このような動員方式は全国の各地で、新政権の宣伝として進行していた。識字教育においては、読み書きできない苦しみをなめ尽くしたことを訴え、識字教育の必要性を確立した。『人民日報』と『人民教育』には、当時の「訴苦会」に関する内容が掲載されていた。表1は、その内容を示している。

表1 50年代の「訴苦会」の内容

事例1	地主に搾取されていた楊景雲は、朝から晩まで働いていたが苦しい生活からは抜け出すことができず、勉強する余裕がなかった。現在は共産党のおかげで、教育を受ける機会を得ることができた ⁽¹⁷⁾ 。
事例2	小商いをしていた趙老師は、掛売りを記録することさえ上手くできなかった。そのため、政府が作った名簿をもとにして簡単な記録を付けていた。しかし、字が読めないために、誤った記録を付けてしまうことも度々あった。時には何も買っていない人にお金を請求してしまい、大変な目に合ったこともある ⁽¹⁸⁾ 。
事例3	幹部であった李織鎖は文字が書けなかったために、役所の会議では記録を残すことができず、自分で記憶するしかなかった。役所からの連絡事項を伝えることや表に記入することもできず、いつも字が読める人に手伝ってもらう必要があった ⁽¹⁹⁾ 。
事例4	漁業で生計を立てていた老工友は大連で魚を売っていたが、道に迷って軍事基地の中に入ってしまった。彼は「軍事要地、通行禁止」の看板を読むことができず、軍人に捕まれて暴行を受けた ⁽²⁰⁾ 。

出典：『人民日報』、『人民教育』より 筆者作成

以上の事例から、解放戦争期のように、民衆が地主に過酷に搾取されたことを訴えたことが見られている。だが、それより、建国後の識字教育においての訴苦会は、今現在の生活に対して字が読めないことの不便さを強調する傾向が強かった。にもかかわらず、どのような時代でも「訴苦会」は政治宣伝の一環としての社会運動であり、政治的な性格を持っている。訴苦会を通じ、同じ経験を共有するという連帯感の醸成によって、識字の重要性が全社会に浸透していた。

「訴苦会」によって、識字教育に有利な世論を形成したが、識字教育を受けたくない人は依然として存在する。その場合、民衆教師は村に一軒一軒回って、個別で動員する。当時の『人民教育』第二卷第一期には、1950年第一次全国工農会議模範教師の代表としての楊会信の事例を取り上げた。

1949年の冬、東北人民政府は識字教育を推進し、2年間で文盲をなくすための基本目標を掲げた。当時、関家村の副村長であった楊会信は村民教師を兼任していた。村では字が読めない647人のうち、実際に識字教育に参加したのはわずか242人であった。楊会信が民衆に教育を行うたびに多くの問題が発生した。夏淑蓮に対して教育を行おうとした際には、彼女が「もうこんな年齢だから（34歳）、今さら勉強しろと言われても無理です。」と言い出した。楊会信は諦めずに夏淑蓮の家に通い、家事や農作業の手伝いをしながら、夏淑蓮に文字の読み書きのメリットと文字が読めない辛さを説いた。三日間通った後、夏淑蓮はようやく納得して識字教育に参加するようになった。また、楊淑玉を教育しようとした際は、彼女は「勉強は無理です。死んでも勉強したくないです。」と言った。楊会信は彼女の言葉を冷静に受け止め、真剣に楊淑玉と話し合った。「識字の授業に参加したくないのであれば、毎日家で字を勉強するのはどうでしょうか？」と勧めると、楊淑玉はしぶしぶ承諾した。そして、数日すると彼女は自分の名前や年齢など簡単な字を覚えることができるようになり、文字に対する興味を抱くようになった。そしてその後、彼女は心から感激し「楊先生、私のために色々してくださって本当に申し訳ありませんでした。明日から識字の授業に参加します。」と言った。教育を避けていた他の村人たちも彼女の姿を見て、識字班に参加するようになった⁽²¹⁾。

こうして一人ひとりを動員することによって、もともと学習意欲がない民衆も識字教育を受けた。しかし、農民たちは識字しなければいけないという緊迫感を感じて自分たちのために識字教育を受けるといふより、むしろ、民衆教師の努力に感動し、民衆教師のために識字教育に参加したことが窺える。ここから、動員の成否は民衆教師の声望と根気強さによっていたことが推測できる。

（2）識字教育の保障

識字動員を通じ、民衆は識字教育に対する意欲が掻き立てられたが、実際のところはまだまださまざまな困難が目の前に横たわっていた。『人民教育』などに掲載した文章には、識字教育の遂行において、①極困の中国においては、如何にして民衆の生活における経済的問題を解決するのか。②婦人が識字

教育に参加すると、子どもの養育は誰が担うのか。③教育経費が少ないため、教科書や文房具の費用はどうすればいいのか。という3つの問題が見られた。表2は、その内容を示している。

当時の中国では、民衆を識字教育に参加させるには、単なる学習意欲を喚起するだけでは不十分であった。より多くの人たちに識字教育を受けさせるためには、民衆教師は識字を教えるだけではなく、學員の識字意欲を継続させるため、識字教育に参加する様々な困難を解決するための模索もしていた。したがって、当時の識字教育という仕事は公的領域を超えて、私的領域にも持ち込まれたことが推測できる。

表2 民衆の識字教育に対する困難と解決策

問題	解 決 策
生活の問題	吉海山は被災地から引越してきたが生活に困窮していたため、識字教育に参加することができなかった。村民教師であった劉海書は、吉海山に藁苞を作るという仕事を提案したが、吉海山はその元手となるお金がなかった。そこで劉海書は、合作社（地域の協同組合）で100斤の草を彼に貸し出した。これにより、吉海山は藁苞を作ることで生活が改善し、識字教育にも参加できるようになった ⁽²²⁾ 。
	劉徳の60歳の父親は目が見えず、伯父と妹の足は萎え毎日家にいる状態であり、劉徳は家族を一人で養わなければならなかった。張立珍は、孟広発というむしろ打ちが人手を探していることを思い出し紹介した。家でもできるむしろ打ちのおかげで、劉徳はお金を稼ぐことができた。それから、劉徳は毎日2時間冬学に参加するようになった ⁽²³⁾ 。
子どもの養育	民衆教師であった楊会信は村の幹部と相談して、農村託児所（乳幼児を預かり保育する施設）を設けた。託児所には保育をする10人の女性（識字教育の参加者）が集められたが、母親たちは託児所に対する不信感から、なかなか子どもを託児所に預けようとしなかった。楊会信は母親たちを託児所に案内し、自分の目で託児所の状況を確認させた。これにより、母親たちは安心して子どもを託児所に預るようになり、母親たちも識字教育に参加していった ⁽²⁴⁾ 。
	孫淑芝は村に3つの託児所と8つの託児組を作った。また、識字班に行っている間、家の留守番が不在になるため、孫淑芝は信頼のおけるお年寄りに留守番を依頼した ⁽²⁵⁾ 。
教科書や文房具の費用	識字班による文字の教育が始まったところ、チョークや文房具などを購入する経費すら村にはなかった。この問題は、参加者の学習意欲の低下につながる可能性があったため、問題を解決するために楊会信は参加者たちを集めて漁に出る。彼らは三日間で40キロの牡蠣を獲り、売却したお金で識字班に必要な一年分のチョークを購入した ⁽²⁶⁾ 。
	劉作新の妻が町でうろうろしている様子を見て、董雲波は「どうして識字班に参加しないのですか」と声をかけた。彼女は「鉛筆がないので教室で何も書くことができないので恥ずかしい。」と答えたため、董雲波は自分の鉛筆を彼女にあげた。後で調べてみると、村ではこのような問題を抱えている人が多いことがわかった。董雲波は奨励品としてもらった鉛筆をすべて村人に配り、自らは夫の旦那の鉛筆を使用した ⁽²⁷⁾ 。
	識字班の経費問題を解決するため、孫淑芝は結婚の時にもらった銀の腕輪を寄付した。また、識字班の机や黒板、灯油なども全て學員たちの協力によって用意した ⁽²⁸⁾ 。

出典：『人民教育』、『旅順大连地区一九四九年的识字运动』より筆者作成

3. 識字教育の進行

教育対象である非識字者は、日頃、農業などの仕事をしなければならないため、当時の識字教育では学校のようなところで一斉授業を行うことは少なかった。一斉授業である識字班は主に農閑期（毎年11月から3月まで）で「冬学」という形で行われていた。民衆の生活状況に応じて、識字教育は互助組による学習や「小先生」が「送字（漢字を家に送る）」するなどの多様な形態を創出した。これは限られた教育資源を活用するための工夫であった。

①互助組による学習

1949年9月から、合作化運動（各種の互助合作の形式を通じて、土地、生産手段の私有を基礎とする個別経営から公有を基礎とする合作経済に変わる運動）が行われた。この中で、互助組のような小規模的な組織が形成された。互助組においては、同じ職業に従事している民衆が集まって、各自が所有する家畜や農具などの生産手段を共有し、共同労働を行った。

識字教育は互助組によって、民衆が仕事をしながら勉強するというような形で展開した。ここで、陝西省榆林市周家圪崂村の事例を通して、当時の互助組による学習を分析する。当時の圪崂村では、識字教育の参加者は合計66人であり、村の半分程度の民衆が参加した。學員大会で学習計画及び生産計画を同時に制定し、学習組と生産互助組を統一し、生産互助組の組長も学習組の組長も同じ人で担任している。当時、周家圪崂村には全部で9組があった（表3参照）。

表3 周家圪崂村の学習組に関する状況

名前	人数	組長	内 容
輸送組	4	杜修業	4人のうち3人は他の町に行き商いをする。出発前に今回学ぶ漢字を受け取り、歩きながら覚えていく。一人は家で休みながら勉強する。
熬硝組	8	紹祥	（硝薬を作る）熬硝の仕事がある時は朝と夜に勉強し、休みの日には丸一日勉強する。
堆粉組	2	なし	（春雨を作る）午前と午後に春雨を作り、昼休みと夜に勉強する。
茶飯組	3	杜頼	（屋台を出す）茶飯組は3日間勉強、2日間仕事の日程を繰り返す。毎月0と5のつく日には縁日に出かける。
雑務組	7	杜修育	雑務組は村の雑務をしながら毎日勉強する。
放羊組	6	胡棍	（羊飼いの）放羊組は朝に当日学ぶ漢字を受け取り、羊飼いの仕事をしながら勉強する。夜には当日覚えた漢字の復習をする。
拾糞組	6	杜二高	（家畜の糞を拾う）拾糞組はほぼ毎日勉強するが、縁日の際には道に家畜が多く集まるため、家畜の糞を拾う仕事をする。
領字組	3	なし	（村で物売りをする）組物売りをする村人たちは3日に一度集まり、識字教育に参加する。
婦人組	24	杜修儀	4組に分かれて、毎日勉強する。

出典：人民教育社『較好的冬学和常年民校』⁽²⁹⁾1950年より 筆者作成

周家圪崂村の事例によって、当時の識字教育は、民衆の生活に合わせ、比較的柔軟性のあるものとなり、全面的に推進することができたことがわかる。

②「小先生」

識字教育を始めた時には、読み書きのできる人すら少なく、どこでも識字教師を見つけられない場合もあった。この問題を解決するため、読み書きのできる小学生は「小先生」と呼ばれて、識字教育に参加させた。例えば、河北省の元朝県では、1952年に教師は138人に過ぎなかった一方、「小先生」は3405人もいた⁽³⁰⁾。そして、この「小先生」たちはのちの識字教育の成功に不可欠の条件となっていた。当時の中国においては、多くの婦人は家事や子どもの世話などをするため、識字教育に参加しなかった。また、多くの高齢者や障がい者も識字班に行くことができなかった。このような状況に応じて、小先生たちは識字教育に参加しなかった人々の家に行って、「送字」という形で識字教育を行った。当時の『人民教育』第二巻第一期には、民衆教師である任逢華に率いられた「小先生」の事例を紹介している。これを通して、当時の「小先生」制度の内容や流れが窺える。

村民教師である任逢華は、毎日同じ時間帯に「小先生」と呼ばれる小学生たちにその日に学ぶべき漢字（平均3字）を丁寧に教える。その後、小先生たちは村人たちの家に行き、「送字」と呼ばれる訪問学習を行う。送字の日程は特に決まっておらず、小先生の都合によって、月一回、二週間一回、週一回など様々である。毎回、小学生による送字では、前回教えた漢字を覚えているかどうかを確認する。さらに、遠方の村に対しては「村転村」という方法を用いて、村の小先生が別の村の小先生に教育をする。任逢華は送字による教育活動の状況や実績をまとめるために、定期的に小先生を集め会議を開いた。（中略）また、小先生は送字の他にも、臨時の識字所や試験所などを設立し、街頭で送字を行うこともあった。日曜日や放課後には、小学生は二、三人が集まり、通行人に対して黒板に書いた漢字やピンインを正しく読めるかどうかをチェックしたり、教えたりする活動も見られた。このような活動は、空いた時間を利用して漢字を覚えることができるため、非常に人気があった。⁽³¹⁾

確かに、月一回、二週間一回という頻度の教育、もしくは街頭でたまに覚えた漢字は、実際にはどのような効果が見込めるのか僅かに疑問を感じたが、識字教師の不足という問題に応じて生まれた「小先生」制度は、当時の識字教育の継続に対して極めて重要なことであった。

4. 教育の内容

1950年12月14日、教育部が発布した「農民業余教育に関する指示」においては、「農民業余教育は3年で文盲・半文盲に1000字以上の漢字を覚えさせ」、「農民業余教育は識字教育を中心にし、政治教育、生産教育の内容も含めて教える」と規定されることになった⁽³²⁾。このような方針の下で、

表4 『農民冬学課本』目次

	農民翻身	土地改革	農民協会	地主に警戒する
5 ～	流言を見破る	地主を倒す	人民の力量	反革命の鎮圧
9 ～	反動会道門の鎮圧	木蓮は毒がある	零陵大火災	人民法廷
13 ～	民兵	敵を見極める	朝鮮戦争	張り子のトラ
17 ～	アメリカを倒す	軍属を優遇する	増産と献納	人民民主專政
21 ～	人民代表会	人民代表になる	幹部になる	人民の力
25 ～	欠点を正す	婚姻自由	婚姻法	新聞を読む
29 ～	黑板报	新道德	愛国生産	綿花の栽培
33 ～	互助組	合作社	工農互助	工人の腕がある
37 ～	新式農具の紹介	新式農具の良さ	労農同盟	機械化工場の見学
41 ～	東方紅	中国共産党	人民解放軍	祖国を熱愛する
45 ～	ソ連は我々の友人	ソ連の農民生活		

出典：中南人民出版社編『農民冬学課本』⁽³³⁾1951年より 筆者作成

太字：政治に関する内容である。下線：生産に関する内容である。

当時の識字教育は政治、生産の内容を含め、漢字を教える。ここで、1951年出版された『農民冬学課本』を通し、建国後における識字教育の内容を検討する（表4参照）。

1954年の「江蘇省人民政府掃除文盲工作委员会連合通知：頒發1954年冬学工作指示」では、「1954年の冬学は農村で行う様々な事業と緊密に結びつくべき、政治教育も必要となる。冬学を通じて、民衆が社会主義に対する意識をあげつつ、農村の事業も順調に進める」と述べている⁽³⁴⁾。『農民冬学課本』の目次からは、6割以上が政治に関するものであり、3割は当時の農業生産に関する内容であることがわかる。当時の識字教育の教科書では、国民政府の権威の剥奪と新中国を支える新しい政権の権威を確立するため、政治色がかなり強かった。

5. 考察：民衆教師の役割

建国後の識字教育を踏まえて、当時の「民衆教師」は、単なる読み書きを教えるという民衆教師の元々の役割を果たしたほか、次の三つの役割を果たしたと考えられる。

① 識字教育の経費削減。50年代に極貧にあった中国では、識字教育は深刻な経費不足問題を直面にした。当時の民衆教師は自分の仕事を読み書きのできる者の当然負うべき義務と認識させられた。結果として経費負担の軽減に繋がった。例えば、江蘇省1954年の資料によって、専任教師の給料は毎月2.5万元（今の2.5元）であったが、民衆教師の奨励金は、毎月3000元（今の0.3元）程度であった⁽³⁵⁾。さらに、このわずかの奨励金でも一部である優秀民衆教師のみもらえ、その条件は非常に厳しかった⁽³⁶⁾。ほかの民衆教師は表彰状や文房具などの授与のみであり、無償で働く場合も少なくは

なかった。どちらかとなると、民衆教師はその奨励を精神的なものと強く感じた。

また、当時、識字教育の経費は、政府が負担するよりは、農民たちから募金し、あるいは食糧、灯油や、薪などの実物を寄付するような形で集まった。しかし、農民たちに負担がかかりすぎると、学習意欲がなくなる。そのため、識字教育に必要な教科書や、文房具などを民衆教師が自分で準備しておくケースが多かった。つまり、読み書きを教えるという仕事は「義務化」されたように、民衆教師も「聖職者」のように無償で働いた。それにより、当時の識字教育の経費問題が軽減できた。

②民衆に新政権のイデオロギーを受容させた。1949年、新政権を樹立したばかりの中国には、近代化した政治を実現するという国のニーズと、伝統的な小農社会に暮らしていく農民たちの間に、大きなズレがあった。抑圧に慣れた民衆に、自分自身が「新社会の主人公」という認識はなかった。それを受容させるため、教師は、国家と民衆の媒介となった。国家意思の代表者である民衆教師は、国の政治要求と生産要求を満たすため、当時の識字教育の下には、政治教育と生産教育も行われた。結果としては、国家意思を一般民衆に納得させると、上意下達という行政ルートが形成された。それゆえ、1958年の大躍進運動や人民公社運動が全国で遂行できたと言える。

③民衆の学習意欲を喚起した。中華人民共和国建国直後の識字教育は、農民の「翻身」の一環としての「文化翻身」と認識され、共産党の社会主義イデオロギーと親密に繋ぐ社会運動であった。社会運動としての識字教育は、決して学校という場所に限定されたものではない。当時の識字教育は、今現在のあらゆる教育形態と異なり、まるで全地域が識字の場になった。人々の生活、仕事や、学習などのことは、全て識字教育という社会運動の中に巻き込まれていた。また、50年代の中国社会においては、「公的領域」と「私的領域」が曖昧であり、民衆教師という職業も「公的領域」の範囲を超えて、教師の私生活にも入り込んだ。識字教育の中で、民衆教師は様々な面で民衆たちを助けながら、学員と親密な人間関係を構築した。朝夕を共にしているうちに、民衆にとって、民衆教師は家族のような存在になった。民衆教師は民衆の生活の問題を解決したり、子どもの世話をしたりすることによって、民衆が識字教育に参加できることを保障した。

終わりに

本稿は、中華人民共和国建国直後における識字教育の中で、民衆教師の実態と役割について考察した。1950年に発布された「以民教民，能者為師」（民を持って民を教え、能力あるものを師にする）という政策により、民衆教師は識字教育の担い手として活躍した。

当時の民衆教師は、単なる読み書きを教えるだけではなかった。識字教育に対する有利な世論を形成し、民衆の学習意欲を喚起するため、民衆教師は「訴苦会」という大衆の集会を開催したり、村に一軒一軒回って、個別で動員したりすることがあった。また、識字教育を推進するため、民衆の識字教育に参加する様々な困難を解決するための模索もしていた。例えば、民衆教師である劉海書は貧困

の中で暮らす人々に生計を立てる方法を教えた。よって、当時の民衆教師の仕事は公的領域を超えて、私的領域にも持ち込まれたことが窺える。ところが、当時の民衆は、日頃、農業などの仕事をしなければならないため、識字教育は互助組による学習や「小先生」が「送字」することなどの多様な形態を創出した。民衆の生活に合わせた識字教育は、比較的柔軟性のあるものとなり、全面的に推進することができたことがわかる。

民衆教師の実態を踏まえ、社会運動としての識字教育の中で活躍した民衆教師は、①識字教育の経費削減。②民衆に新政権のイデオロギーを受容させた。③民衆の学習意欲を喚起した。という3つの役割があった。

民衆教師の実態と役割についての検討により、当時中国社会の独特の風貌も窺える。しかしながら、本稿は、特定の時期を限定し、識字教育は時代とともにどう変化していったのかについて言及できなかった。今後の課題としては民国期も含め、各時期において、識字教育の変化を具体的に検討したい。

注(1) 本稿では、中華人民共和國が成立後から人民公社運動（1949～1958年）における識字教育の展開について設定する。1958年から、大躍進と人民公社運動の展開により、識字教育は中断された。

(2) 毛沢東「抗日戦争勝利後の時局と我々の方針」『毛沢東選集』、人民出版社、1991年、1133頁。

(3) 「中国人民政治協商会議共同綱領」『建国以来重要文献選編（第一冊）』、中央文献出版社、1993年、1頁。

(4) 浅田加葉子『当代中国掃盲考察』、当代中国出版社、1999年、1頁。

(5) 劉英杰『中国教育大事典 1949～1990（下）』、浙江教育出版社、2004年、1824-1825頁。

(6) 中国教育年鑑編輯部『中国教育年鑑』、中国大百科全書出版社、1984年、125頁。

(7) 江蘇省教育庁計画財務処『1955年省級單位教育支出年度予算及省人委核定通知』、40130010042。

(8) 郷土社会とは、中国の伝統的農村社会である。農業で生活している人は、現代都市とは異なり、代々同じ土地で定住しているため、移動は尋常ではないのである。郷土社会の子どもは顔見知りの人々の中で成長し、言語によって世代間の経験を伝達できる。対面して親密に接触する中で同じ生活の仕方を繰り返している郷土社会の人々にとって、文字のようなものは必要ではないと考えられる。

(9) 費孝通『郷土中国』、生活・読書・新知三聯書店、2013年、9-16頁。

(10) 前掲6、578頁。

(11) 大原信一『中国の識字運動』、東方書店、1997年。

(12) 和芳芳「1949-1956年共和国農民教育初探」、西安理工大学修士論文、2008年。

(13) 馬叙伦「第一次全国工農教育会議に関する報告」、『人民教育』、第1巻、1951年、12-13頁。

(14) 周恩来「中華人民共和國國務院農民業余文化教育的強化に関する指示」、『人民教育』、第8巻、1955年、50-51頁。

(15) 江蘇省人民政府文教委員会『掃盲委員会成立和委員名單、1953年以来掃盲工作情况及今后工作意見報告』、1954年、40120020012。

(16) 皇甫瑾「冀晋両省解決冬学民校師質問題的实例」、『人民教育』、第2巻、1950年、56-58頁。

(17) 徐默听、曲琛「模範老教師楊景雲」、『人民日報』、1950年5月25日、第4版。

(18) 鲁成「閻玉民和東丈村民校」、『人民教育』、1950年、第7巻、62-63頁。

(19) 人民教育社『幹部帶頭和模範教師』、人民教育出版社、1951年、104頁。

(20) 文友仁「人民教師趙慶生」、『人民日報』、1950年4月5日、第6版。

(21) 李建蔚「模範群衆教師楊会信」、『人民教育』、第7巻、1950年、60-61頁。

(22) 西鴻「從石匠到模範教師——劉海書」、『人民教育』、第7巻、1950年、59-60頁。

-
- (23) 林青「吉林榆樹県正義村の農民業余文化学習——模範農民業余教育工作者張立珍訪問記」、『人民教育』，第8卷，1955年，54-55頁。
- (24) 前掲22。
- (25) 戈深「松江省優秀教師孫淑芝的工作經驗和特点」、『人民教育』，第7卷，1952年，32-33頁。
- (26) 前掲21。
- (27) 旅大行政公署教育庁『旅順大連地区一九四九年的識字運動』，新華書店，1950年，64-66頁。
- (28) 前掲25。
- (29) 人民教育社『較好的冬学和常年民校』，人民教育出版社，1950年，49-52頁。
- (30) 前掲15。
- (31) 洛寒「群衆教師の旗幟——任逢華」、『人民教育』，第7卷，1950年，55-57頁。
- (32) 前掲5，1832頁。
- (33) 中南人民出版社編『農民冬学課本』，中南人民出版社，1951年，目次頁。
- (34) 江蘇省教育厅掃盲办公室『省掃盲委员会1954年冬学工作に関する指示』，1954年，40130010027。
- (35) 江蘇省人民政府教育庁『1954年掃盲事業費用開支標準及1954年專署業務經費及春季事業費開支使用弁法』，1954年，40130030257。
- (36) 江蘇省人民政府教育庁『1954年扫盲事业费用开支标准』，1954年，40130030257。